

第 4 回

『大名行列の秘密』

安藤優一郎、生活人新書、2010年

第3回のテーマは参勤交代でした。そして、参勤交代と言えば、「大名行列」ですね。そこで、今回は参勤交代を「補強する」ために、大名行列についてまとめていきましょう。

今回勉強させていただく本が上記の**安藤優一郎氏の『大名行列の秘密』**です。歴史家の安藤氏は江戸をテーマとする執筆・講演活動を精力的にされており、東京理科大学生涯学習センター、JR東日本大人の休日・シバング倶楽部「趣味の会」、NHK文化センターなどで「生涯学習講座」の講師として活躍されておられます。『幕臣たちの明治維新』（講談社現代新書）、『幕末維新 消された歴史』（日本経済新聞出版社）、『「幕末維新」不都合な真実』（PHP文庫）、『不屈の人 黒田官兵衛』（メディアファクトリー新書）、『新島八重の維新』（青春新書インテリジェンス）など多数の著作があります。

そうだったのか！大名行列！

『大名行列の秘密』はなかなか面白くて、「へー、そうだったんだ」と感動させられたことがいくつもありました。本の出だしはこんな感じで始まります。

大名行列というと、とにかく長いというイメージが強いだろう。加賀百万石の前田家などは、行列の人数がなんと4000人にも及んだ。

なぜ、そんな長い行列を仕立てて国元と江戸の間を往復したのか。幕府から課された義務だったからだ。将軍に忠誠を誓う参勤交代の制度により、原則として江戸で1年間生活

するため、国元と江戸の間を1年おきに行ったり来たりしていたのである。

大名行列とは、大名家の存在そのものであるお殿様を移動させる行列である。その身に何かあれば御家断絶。となれば、護衛の武士で大人数となるのは避けられない。それも一朝事あらば、すぐさま戦闘状態に入れるよう隊列を組んだ軍装の行列だった。

さらに、こんな記述もあります。

大名行列とは一言でいうと、動く武家社会。将軍と大名から構成される武家社会の序列が視覚化されるのである。

このあたりの記述は「参勤交代」のことを理解していれば、当たり前と思える内容ですよ。でも、この先を読んでもみると、少し意外な感じがします。

大名行列というと参勤交代のイメージが強いため、街道を行き来する光景が思い浮かぶかもしれない。だが、江戸滞在中でも、大名が移動する際には行列を組んだ。江戸城に登城するときも同じだ。そのことは、もっと注意されてよい。

江戸は大名行列のあふれる町だったという、意外な感じがするかもしれない。しかし、三百諸侯の約半数が常時滞在していたわけだから、一斉登城日などは、江戸城の城門前はものすごく混雑する。江戸の観光名物になっていたぐらいだ。

大名行列といえば、東海道や中山道などの五街道を中心に、国元を出発してから何十日もかけて、雨の中、風が強い中、時には川が氾濫して向こう岸に渡ることができず、宿場町で何日も足止めをくらうなどの幾多の試練を乗り越えて、ひたすら将軍のいる江戸へ向かって進んでいくというイメージがしますよね。

ですから、江戸の町中で大名行列が行ったり来たりしているという風景は、頭の中にありませんでした。

そういえば、**桜田門外の変で暗殺された彦根藩主・大老の井伊直弼**の行列も大名行列なんですね。あの行列の場合、約60名の隊列でした。それに対して、襲撃した水戸藩などの浪士は18名でした。

なぜ、たった18人で60人の行列に斬り込んで、井伊直弼の首級を取ることができたんでしょう？ 不思議だと思いませんか？ 1対3ですから、断然襲撃する側が不利ですよ。

この日、安政7年（1860年）3月3日は季節外れの大雪でした。そのため、60名の家来たちは刀が錆びるのを防ぐために、柄袋をつけていました。従って、突然襲撃されて

も多くの者は刀が抜けず、当然ですが、寒いから手は悴んでいるでしょうし、結んだヒモもなかなか解けなかったでしょう。慌てれば慌てるほど、思うようにいかず、刀を抜く前に斬り殺された家来もいたことでしょう。

この**季節外れの大雪という天気と危機意識のない防衛体制が井伊直弼が暗殺された原因**だと思っていたのですが、この『**大名行列の秘密**』を読むと、それだけではなかったことがわかりますし、別の面が見えてきます。

というのは、60名の家来といっても、刀を持った武士は多くなかったのではないか、ということに気がついたのです。

調べてみると、行列「60名」のなかで、いわゆる上士は15名しかいないんです。ほかは足軽とか馬夫などなんですね。しかも、このなかの何人かが「派遣社員」だったとしたら、お殿様を命をかけて守ることなんてしないのは当たり前でしょう。「命をかけ」なければならぬのは、15名の武士たちです。

この武士が15人、そして襲撃側の武士が18人。これならほぼ「対等」と言えます。

でも、実はこれだけではなかったんです。

昨年放送された**NHK『歴史秘話ヒストリア』**のなかで「桜田門外の変」が取り上げられていました。数年前に「新発見」されたという史料に基づいて番組が編成されていた。

まず、**第1に、この襲撃は2度目**で、1回目の失敗（これは、たった一人で、行列から離れたところから、動いている駕籠めがけてピストルで撃つ、というものでした）を教訓にして、作戦を練り上げて、組織だって襲撃したから成功したこと。

第2に、この襲撃はわずか3分で終わったこと。

ほかにも、この直弼を打ち抜いたピストルについての興味深いエピソードが紹介されていました。とにかく、びっくりさせられたことが数多くありました。

話が脱線してしまいました。元に戻りましょう。

旅先では人数半減！

参勤交代のため、江戸に向けて出発するときの行列は、映画や大河ドラマなどで見るように、非常に華やかなものでした。大名行列本体だけではなく、お殿様を見送る家臣達が加わっているため、行列の人数はとて多くなります。

ただし、その人数のまま江戸に行くわけではないんです。当然ですが、見送りの家臣達は、城下の外れまで殿様を見送ったら引き返しますし、行列が自藩の領内を出てしまうと、さらに人数は減ります。

どんな人たちが引き返してしまうのでしょうか？

まずは、**供侍という形で行列に加わっていた家臣達です**。それから、**行列の半分ほどを占めていた人足たちです**。彼らは、お殿様の御威光を領民に知らしめるために動員されただけなんです。

つまり、城下を出発した行列の全員が江戸まで行くわけではないですし、人足に至っては、その日だけ雇用されて行列に加わる「派遣社員」のような存在だったんです。

ちなみに、大名行列には、「本御行列」と「御道中御行列」の2つがあったそうです。**「本御行列」というのは、国元を出るときや江戸に入るときなどに組まれる行列です。もうひとつの「御道中御行列」とは、それ以外の時に組まれる行列のことです。**ですから、「御道中御行列」は「本御行列」の3分の1から2分の1程度の規模だったようです。

国元を出発するときは領民の目があるし、江戸に入るときは江戸の人々の目がありますから、意識的に華麗な大名行列にしているわけですが、その時以外は半分くらいの規模にしているんですね。

享保の頃の数字では、10万石の大名の場合、その人数は280人ぐらいだそうです。元和元年では、1万石クラスの名大などは37人という極端な事例さえあるそうです。大名行列の大半は、150人から300人ぐらいの規模だったんですね。

将軍様への「おみやげ」

さて、江戸に到着した大名は、自分の江戸屋敷で旅の疲れを取ったらすぐに江戸城に登城します。その際には、大名は手ぶらで行きません。当然ですよ。今でも、大事なところに行く場合は、お土産を持って行きますよね。大名も、必ず国元の物産・名品などを将軍に献上しました。

黒書院で拝謁する際、将軍の前で、その献上品が披露されるんです。加賀前田家では8代将軍の頃までは、白銀500枚、八講布20疋、染手綱20筋を献上したそうです。それだけではありませんよ。

将軍の御台所（奥様）、将軍の世継ぎ、さらに老中や将軍側近の側衆にも金品が贈られているんですね。

とすると、この献上品でけちっていたら、大名が将軍の前で恥をかくことになります。そうならないようにするために、大名は見栄を張らざるを得なくなります。そこで、幕府も献上品に関する規定をとりまとめていくようになりました。

さきほど、白銀500枚という数字が出てきましたが、実は将軍に銀を献上する際、大名は同じく銀などを下賜されていました。つまり、「お返し」をもらうんですね。そして、その量も大名の石高や家格で決められていたのです。

大名行列の人足って

さて、**参勤交代の費用はどのくらいだったのでしょうか？**

『**大名行列の秘密**』のなかで**鳥取藩**の事例が紹介されているので見てみましょう。

これは文化9年（1812年）の江戸から国元に帰る時、18泊19日かかったものなのですが、総額が1957両かかっています。

内訳は、人足費に847両、馬代や川越船代などの運賃に492両、様々な物品の購入費が387両、そして本陣での宿泊費が97両などでした。ちなみに、**国元から江戸までの道中にかかった経費は、大名家の支出の5～10%程を占めていたそうです。**

江戸入りの際の行列は華美になりがちで、江戸屋敷詰めの家臣の他、江戸で臨時に雇用した人足達で占められました。国元から江戸までの道中にしても、そうした事情はあまり変わらなかったようです。その方が経費節減になるからなんですね。ですから、大名行列は「正職員」だけではなく、「派遣の臨時職員」に大きく依存していた、と言えます。

また、人足の雇用形式ですが、国元から江戸までの間、荷物の運送を「通し」で請け負わせる形が取られたそうです。これを「通し日雇い」と呼び、その雇用期間は数日から10数日ということになりました。前田家などは「通し日雇い」が行列人数の3分の1を占めましたが、依存度の高さは他の大名家においても同じでしょう。

つまり、**大名行列は街道筋の地域経済を活性化させながら、江戸と国元の間を移動していましたが、その経済効果は街道筋だけにもたらされたものではありませんでした。米屋のような江戸の人足派遣業者もその恩恵を大いに享受していたのです。**

人足の日当の基準は

さて、江戸入りの時は、大名行列を華やかに見せようと人数が増員されるのが普通でした。そのため、人足の需要は高かったといえます。

ただ、**『大名行列の秘密』**によると、ある基準で日当が違うことに気がつきます。では、**人足たちに対して支払われる日当は、何の違いによって高低差がつくのでしょうか？**

文政12年（1829年）のデータがありまして、「駕籠かき」の日当で見ていきます。

身長が5尺8寸から6尺まで（174cm～180cm）の者は銀10匁ぐらい

身長が5尺6寸5分から5尺8寸（170cm～174cm）の者は銀7匁5分が上限

身長が5尺5寸5分から5尺6寸5分（167cm～170cm）の者は銀5匁5分が上限

身長が5尺5寸5分以下（167cm以下）の者は銀2匁5分が上限

ということでした。**1両が銀60匁とすれば、日当は9000円から1万6000円ということになります。**結構幅があり、最近の若者で体格の良い人なら、やってみたい仕事かもしれませんね。

ただし、この日当は明け6つ（午前6時）から暮6つ（午後6時）まで勤務した場合のものになります。この時間帯で終わらない場合は、割増、さらには深夜料金が追加されることになっていたそうです。

午後6時を越えると、割増料金。夜9つ（午前0時）を越えると、「2人前」つまり倍の日当が支払われる規定だったといえます。そして、明け6つを越えると、3倍の日当が支払われたそうです。

さらに、日本橋から1里以上外に出ると、5割増しになり、2里以上外に出ると2人分の日当が支給されるそうです。弁当代がつくこともありました。

特別料金はほかにもありました。元旦から7日までの間は、2人分の日当が支払われ、正月8日から15日と12月20日から晦日は5割増しの日当になりました。年末年始の期間は割増料金なんです。

でも、これは「公定料金」で、実際はそれ以上の金額が支払われたといえます。なぜでしょう？

江戸の町では、需要が供給を上回っていたからなんですね。

参勤交代は金がかかる！

大名とともに江戸屋敷で1年間生活する江戸勤番の家臣のことも『大名行列の秘密』には書かれています。

江戸での生活で、その大名家の年間経費の半分以上が消費されることを考えれば、江戸勤番中の家臣達も多大な出費に苦しんでいたことは容易に想像できる。

そのため、江戸勤番の藩士達への補助制度が設けられていた。前田家の場合、有利息（年6%ほど、15年賦返済）と無利息の融資制度があった。

確かに参勤交代で大名について行く武士たちも江戸で1年間暮らすわけですから、当然それなりの出費が嵩んでいくのですね。自分で用意できれば良いですが、そういう武士は少なく、借金などの工面が必要になりました。

では、当時の貸し付けの利息はどれくらいだったのでしょうか？

幕臣がお金を借りる場合は札差から融通してもらうのが通例でした。幕臣の大半は領地がなく、幕府から俸禄米を支給されていました。お米が給料がわりだったのですね。でも、お米では欲しいものが買えませんから、俸禄米を売り払って生活費に充てていたのです。

札差の年利は18%だったそうですが、寛政元年（1789年）の棄捐令により12%に引き下げられたそうです。

では、町人の場合はどうでしょうか？

江戸の町では「百一文」などの貸し金業があったそうです。「百一文」とは何でしょう？これは朝に銭100文を借りて、夕方に101文にして返すものをいいます。年利にすると、なんと360%にもなります。

こうした利率に比べれば、前田家が設定した年利6%というのはものすごく低利といえます。大名から家臣に対する生活補助としての性格が強い融資制度といえるかもしれません。

将軍の行列と遭遇した外国人とは？

ドイツ人の彼は帰国後の1867年に、この時の旅行記を刊行しているのですが、訪日時に東海道を西に向かう将軍様の行列を目にしていたそうです。慶応元年（1865年）4月11日、彼は横浜に上陸し、居留地のホテルに入りました。その直後に将軍が東海道を通過するという知らせが飛び込んできたため、その行列を見に行ったそうです。このドイツ人とは誰でしょう？ ヒントはトロイア遺跡の発見者、ドイツの考古学者です。

そう、ハインリッヒ・シュリーマンなんです。

彼はトロイア遺跡発掘に取り組む前に、1年以上にもわたる世界周航の旅に出ています。中国に2ヶ月ほど滞在した後、アメリカに向かうのですが、その途中、日本に立ち寄ったのだそうです。

ところで、この時シュリーマンが見た行列は将軍のものでした。では、この将軍とは誰でしょうか？

そうですね。第14代将軍徳川家茂ですね。

この将軍は何家から将軍に招かれたのでしたっけ？

御三家の紀州家でしたね。将軍になる前の名前が徳川慶福でしたよ。

大名行列とは？

大名行列について、いろいろ勉強してきました。あなたの頭の中は整理できたでしょうか？ かって混乱しましたか？

著者の**安藤優一郎氏** は、大名行列について、このようにまとめておられます。

大名行列の政治的な役割とは、将軍をトップとし、その下に諸大名が重層的に連なる武家社会の序列を視覚化することにあった。

将軍の行列に対しては沿道の家々に目張りなどを命じることで、大名行列との差別化を目論んだ。将軍と大名の格差を暗黙のうちに認識させたいという意図が込められていたのだ。徳川姓の大名の行列に土下座させたことにも、徳川家と他大名との格差を認識させようという狙いがあった。

経済的には、江戸や街道筋の消費経済を活性化させる役割を担っていた。

江戸の経済は内需に依存する構造になっていたが、そこで大名行列が果たした役割は大きかった。だが同時に、宿場を中心として、地域社会に様々な波紋を引き起こすことにもなった。

政治・経済に大きなインパクトを与えながら、江戸や全国の街道筋を行き来していた大名行列は、幕末に入ると、その姿を次第に消していく。となると、将軍をトップとする武家社会の序列を浮かび上がらせることは難しくなる。この時点で、大名行列の歴史的役割は事実上終わっていたと言えるだろう。

大名行列がなくなっていったのは、なぜか淋しい気がします。でも、明治に入ると、天皇の行列が全国を回っていくんですね。こうやって、時代が大きく変わっていくのでした。